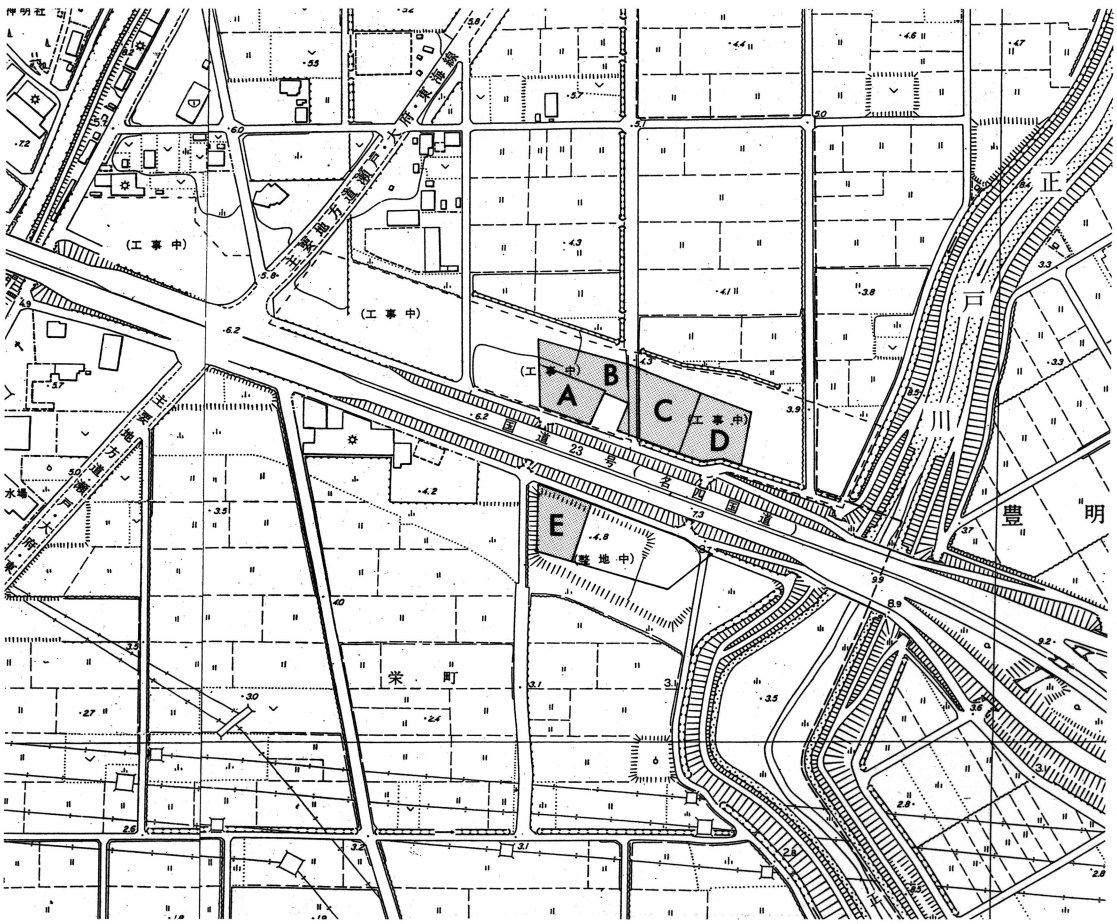
大脇城跡（おおわきじょう）

調査の経過　大脇城跡は、豊明市栄町梶田地内に所在し、尾張・三河の国境を流れる境川の一支流である正戸川右岸の平坦な沖積地に位置する城館跡を中心とする戦国期の遺跡である。標高は約3.50m前後で、周辺に小高い段丘が展開しているにもかかわらず、平坦な場所に存しているのが立地上の特色となっている。

発掘調査は、伊勢湾岸道路・第二東海自動車道の建設にともなう事前調査であり、建設省・日本道路公団から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成８年８月より実施した。本年度の調査面積は、7,200㎡で、Ａ～Ｅの５つの調査区に分けて発掘調査をおこなった。

大脇城について　大脇城について記す文献資料は、いずれも17世紀後半以降の編纂物で、同時代史料は現在のところ見当たらない。そしていずれの史料も、大脇村に古城跡・大脇城が存在し、城主を梶川五左衛門としている。寛文年間（1670年前後）に成立した『寛文村々覚書』には「古城跡　先年梶川五左衛門居城之由　今ハ畑成」とあって、この時期すでに耕地に改変されていた事が知られる。



第１図　調査区位置図（１：5000）

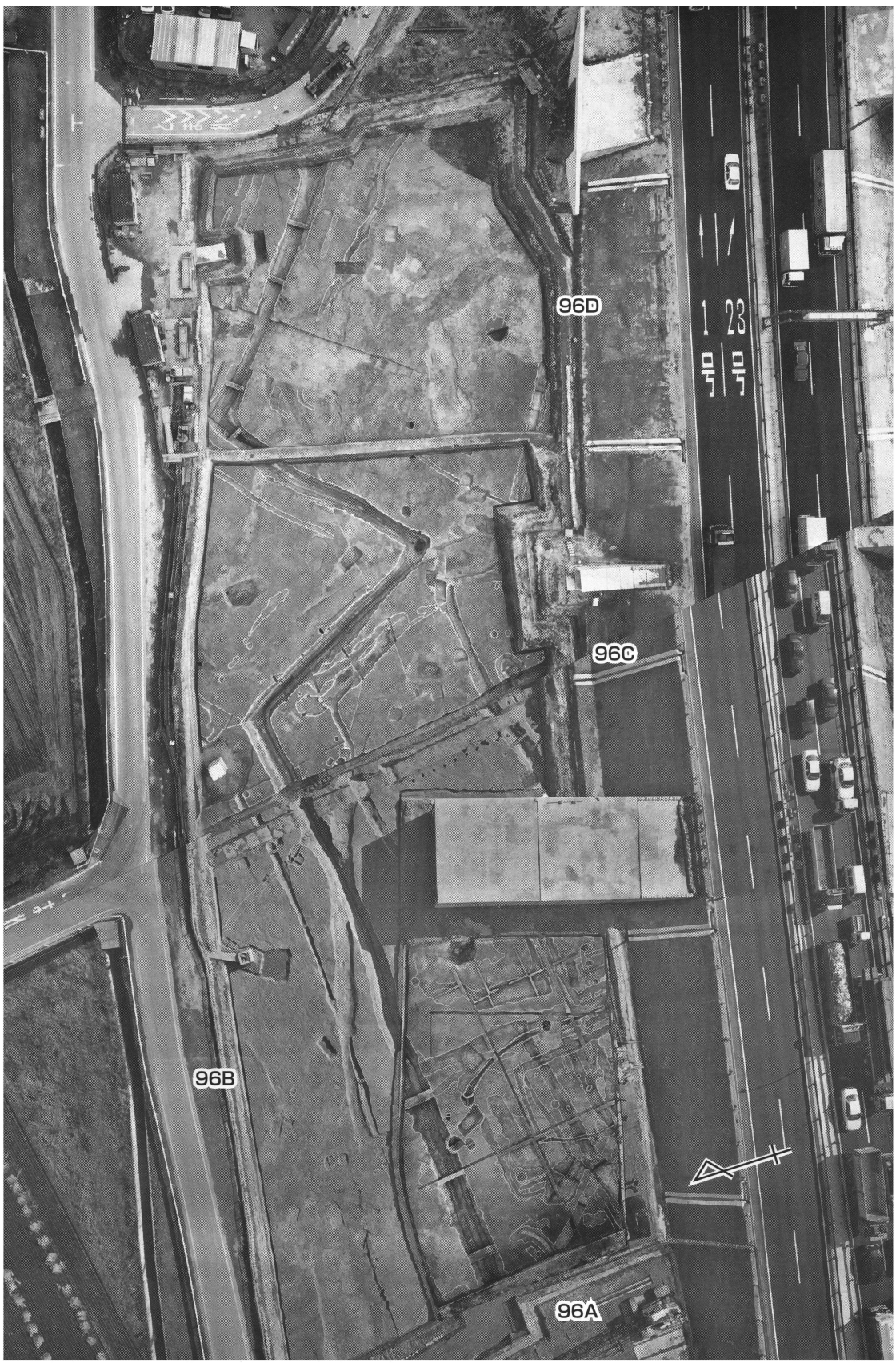
城主の梶川五左衛門の実名は「秀盛」とみられる。（「寛永諸家系図伝」）。梶川五左衛門秀盛は16世紀後半の武将で、その経歴については下表を参照されたい。ただ梶川五左衛門の在城期間・大脇城との関わりなどについては、大脇から横根城（大府市）へ、さらに成岩城（半田市）へと移っていったとの所伝（『尾陽雑記』など）もあって、判然としない点が多い。

調査の概要　遺跡の基本層序は、各調査区とも上から、客土→旧水田耕作土・床土（用地買収前）→黄褐色土（基盤）の順で、遺構はいずれも旧水田耕作土の床土直下で検出された。遺構面の標高は2.5～3.0m前後である。

今回の調査で検出した遺構としては、溝、井戸、堀立柱建物、土坑がある。これらの遺構の細かな時期区分についてはなお検討を要すが、出土遺物からみて、概ね16世紀後半から17世紀中頃にかけての時期のものである。遺構の性格については、その配置、形状、年代等からみて城館跡の一部を構成するものと推定され、殊に96A～D区にかけて検出された幅2.5m前後・深さ1.8m前後の大溝（SD01・06）は、断面の形状が戦国期の城館に特有の「薬研堀」状を呈し（とくにSD01）、城館跡の「堀」と推定されるものである。またこのSD01・06の北側においては殆ど遺構が認められないのに対して、南側では多くの遺構が展開する。こうしたことからみてSD01・06は、城館跡の外側を区画する「外堀」的なものと推察する。

1560　永禄3年5月	桶狭間の戦い この直後、梶川五左衛門、刈谷城主水野下野守信元に属し、松平元康（徳川家康）と刈谷の十八町（緒川の石ヶ瀬とする説あり）にて合戦す、と云う。→「水野勝成覚書」（寛永18／1641）・「松平記」ほか
1574　天正2年	刈谷城主水野信元、織田信長の命により、岡崎にて殺害される。 ＊この後、梶川五左衛門は水野信元のあとに刈谷城主となる佐久間信盛に属することになったとみられる。
1580　天正8年8月	織田信長、佐久間信盛父子を追放。このとき梶川五左衛門、甥の梶川弥三郎とともに信長に召し出される。 →　「池田本信長記」（慶長15／1610）
1582　天正10年6月	本能寺の変 ＊この後、梶川五左衛門は織田信雄に仕えることとなったとみられる。
1573　天正11年11月	梶川五左衛門秀盛、延命寺（大府市）に寺領を寄進す。 →　延命寺文書
1575～86 天正13年～14年	このころ『織田信雄分限帳』、作成される。 梶川五左衛門、1480貫文を知行する。
1590　天正18年	小田原の戦いおこる。織田信雄、参陣する。 そのさいに、信雄、梶川五左衛門を「旗奉行」とす。 →「寛永諸家系図伝　第六」（寛永20／1643） ＊小田原の戦いの後、織田信雄、豊臣秀吉と対立し除封される。このためか、梶川五左衛門は池田照政に仕えることとなる。
1592～1598 文禄元～慶長3年	文禄・慶長の役、おこる。梶川五左衛門、池田照政にしたがい朝鮮へ出兵し、「湯川（現ソウル市近郊）の城に至り彼国の賊徒城をかこむとき、秀盛（梶川五左衛門）城中より敵陣にすすみ出たたかひ死す。」と云い、「六十歳　法名浄慶」と伝う。 →「寛永諸家系図伝　第六」（寛永20／1643）

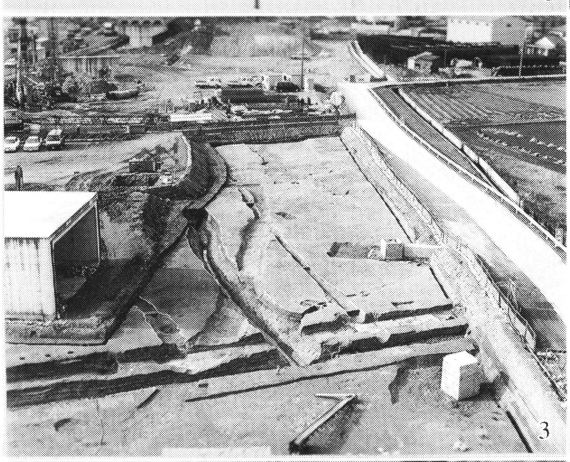
梶川五左衛門秀盛の年譜



第２図　調査区全景（96Ａ区～96Ｄ区）　（約１：520）

1

2


3

4

5

6

7

遺構写真

1　96Ａ区　全景　（東より）
2　96Ａ区　SD01（西より）
3　96Ｂ区　全景　（東より）
4　96Ｂ区　SD01（西より）
5　96Ｃ区　全景　（西より）
6　96Ｃ区　SD01（北より）
7　96Ｄ区　全景　（東より）

出土遺物には、大多数をしめる土器・陶磁器類のほかに、木製品（三方・俎・曲物の底板・建築部材など）、漆製品（椀類）および若干数の石製品（西三河式宝筐印塔の笠部・砥石など）、鉄製品（鉈・刀子など）、銭貨（元佑通寶・元豊通寶・宣徳通寶など）がある。土器類には、内耳鍋・羽釜・茶釜型・小皿類が認められるものの、清洲城下町遺跡（西春日井郡清洲町）においてこの時期に数多くの出土をみるホウロクの出土を見ない点が注目される。陶磁器類としては、織部・志野等をはじめとする瀬戸・美濃窯産の各種製品、常滑窯産の甕・鉢類のほかに唐津窯産とみられる碗の底部片（「一山」と墨書あり）および若干の中国磁器（青花皿類・青磁碗・青磁盤類など）がある。なお銭貨の「宣徳通寶」は国内においてはあまり出土例を見ないものである。

まとめ　検出遺構と「大脇城」との関わりについて、今年度の調査で明らかになった点について、今後の課題をふくめて若干のまとめを行なっておきたい。

1）後世の開墾（上記のように、1670年ころにはすでに「今ハ畑成」という状況であった）・区画整理等により一面が水田化し、地表面に痕跡を留めないため、その実態が判然としなかった「大脇城」の存在が、こうした遺構・遺物の検出によって、より明確になってきたものと考える。

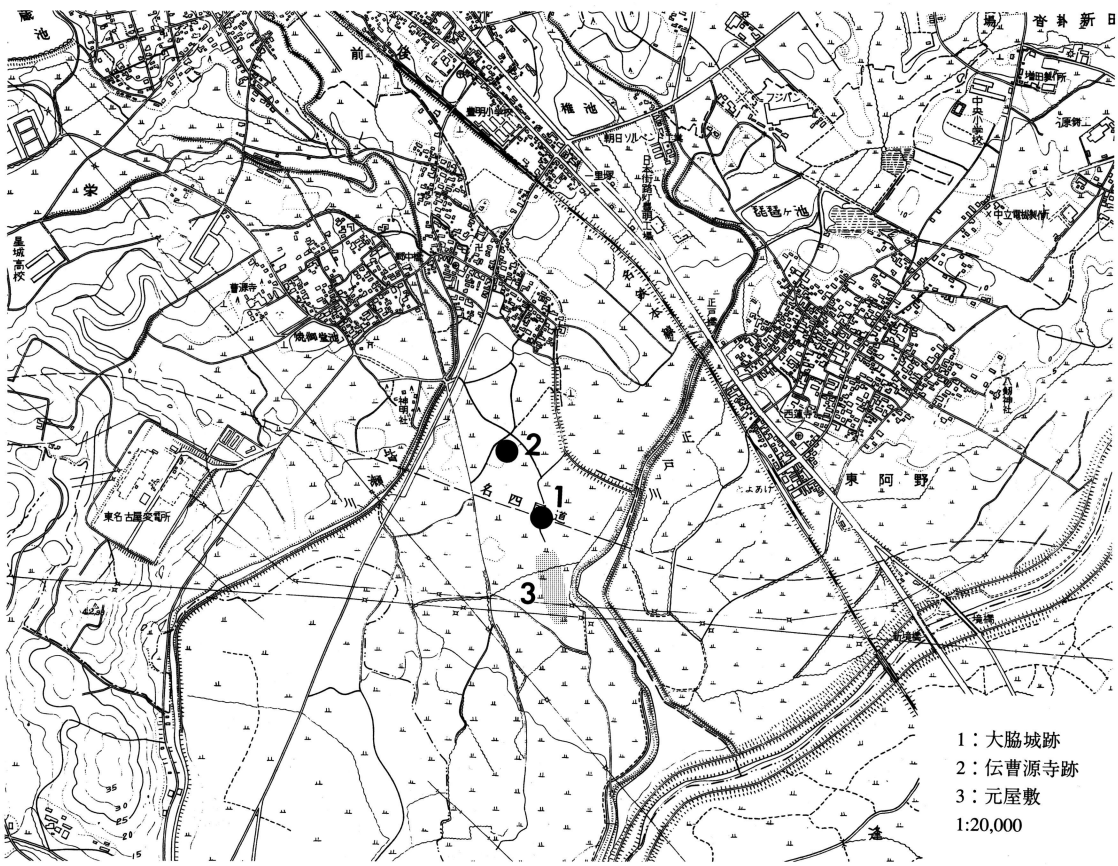
2）ただ現段階では、これまでに発掘した遺構が、大脇城そのものの一部なのか、周辺部の、例えば家臣の館・屋敷地なのか等、今後検討を要す点も多い。なお来年度の調査予

第3図　地籍図と調査区（1：2400）

定地は、遺構が多く検出された96Ｅ区の東側で、地籍図から判読からすれば、大脇城の土塁の一部との所伝のあった地点を含む区画に相当し、その調査結果が注目される。

3）既述のように、大脇城の城主とされる梶川五左衛門秀盛は、文献史料によれば16世紀中頃～末の武将である。秀盛の在城期間の問題はあるが、16世紀後半から17世紀中頃という遺構・遺物の年代は、こうした所伝・記録と特に矛盾するものではない。大脇城の盛衰を考えた場合、文献史料からは判然としないが、17世紀前半の遺物がまとまって出土し継続して生活が営まれていたとみられる点には留意する必要があろう。

4）出土遺物の年代からすれば、遺跡は17世紀中頃をもって途絶する。ＳＤ01の埋土の上層は斑土で人為的に埋められた公算が大であった。ここで想起されるのが、『寛文村々覚書』の「古城跡　先年梶川五左衛門居城之由　今ハ畑成」という記述であり、かつて遺跡の南側の旧字「元屋敷」辺りにあった大脇村が水害対策のため今の高台へ移転したとする「大脇村移転」の伝承である。文献史料によれば、「元屋敷」の地名は17世紀末（元禄11年）の古文書に見いだされ、また調査地点近くに存した曹源寺が1654年に火災に遭い、18世紀初頭には現在地の高台へ移転したという棟札の記述もある。こうした村の移転・開墾といった動向との関わりのなかで大脇城の終焉は理解されるのかもしれない。すべては今後の課題としておきたい。(坂倉澄夫・藤井孝之・北村和宏・秋田幸純)



第４図　大脇城跡周辺の旧地形（名四国道建設前）